

認できる。文化的階層下位グループの子どもたちにとって、新学力観的な学習活動に積極的に関わるものはごく少数にとどまるのである。今回の調査と別に行った学校現場へのヒアリング調査によれば、

調べ学習の時に一体何をしたいのかかわからないまま過ごしてしまう子どもがいるといわれる。グループ学習では一人ぐらい参加していなくてもほかの子どもが活動することで、かわからない子どもがいることに教師が気づかないまま、それなりに作業が進んでいくこともあるという。体験を通じて意欲が高まり、自ら学ぶ力も伸びていくはずだとされているのだが、意欲が高まる手前で、体験的な学習に積極的に関わろうとしない子どもができてしまうのである。しかも、そうした子どもたちは、知識や理解の点で基礎的な学力を十分身につけていない子どもであり、生まれ育つ家庭環境の面でハンディを負った子どもである。“旧”学力同様に、体験的な学習への積極的な関わりに象徴される“新”学力においても、家庭環境の影響が生じているのだ。

意欲や興味・関心は、どの子ども同じように持っているわけではない。同じように引き出すことができるわけでもない。基礎学力がきちんと身につけていない子どもたちに、基礎・基本を学ぶ時間を削ってまで新学力観的な授業を増やしていけば、家庭の文化的環境による格差が、新旧いずれの学力においても拡大していくだろう。以上の分析が示すのは、他の国々でも繰り返し指摘されてきた、「子ども中心主義」教育と階層格差拡大の問題が、日本においてもあてはまることを示している。

## 5. 小学校の授業経験と中学校時の学力

それでは、「新しい学力観」のもとでの学習経験は、その後の学習にどのような影響を与えているのか。つぎに、中学生の学力調査の結果を、小学校時代の授業経験の違いとの関係からみる。それによって、小学校で拡大・普及した「新学力観」型教育の影響について検証が可能になる。

今回の調査では、中学生を対象に、小学校時にどのような授業を受けたかを聞いている。その内容は、

- ① 教科書や黒板を使って先生が教えてくれる授業
- ② ドリルや小テストをする授業
- ③ 宿題がでる授業

表2-5 新学力観的な授業への取り組み(文化的階層グループ別)(%)

	小学校			中学校		
	上位	中位	下位	上位	中位	下位
調べ学習の時は積極的に活動する	64.1	49.0	40.1	51.0	36.6	24.8
グループ学習の時はまとめ役になることが多い	46.5	32.0	24.0	35.6	26.3	16.7

数値はいずれも「とても」または「まあ」と答えた者の割合。

- ④ 自分たちで調べる授業
- ⑤ 自分たちの考えを発表したり、意見を言いあう授業
- ⑥ けじめがあつて、集中できる授業
- ⑦ 何を勉強するか選べる授業
- ⑧ 教室の外で見学したり、体験したりできる授業

の八つである。八項目のそれぞれについて、「とても受けた」「まあ受けた」「あまり受けていない」「まったく受けていない」の四つの選択肢から一つを選んでもらった。

これらの授業のうち、①②③はいわゆる「伝統的」な授業といえる。それに対し、④⑤⑦⑧は「新学力観的」な授業といえよう。今回の調査では、あくまでも生徒側の印象にもとづいて、小学校時代の授業の特徴を回顧してもらった（なお、この分類では、いずれにも分けがたい「⑥けじめがあつて、集中できる授業」は除外した）。ここでは、これらの質問への回答で、「とても」に四点、「まあ」に三点、「あまり」に二点、「まったく受けていない」に一点を与え、①②③を「伝統型」授業、④⑤⑦⑧を「新学力観型」授業として、それぞれ得点を合計して平均を出した。それをもとに、「伝統的」「新学力観的」それぞれの授業について、三・五以上を「とても受けた」、三・五未満～二・五以上を「まあ受けた」、二・五未満を「あまり受けていない」という三つのグループに分類し直した。

これら小学校時代の授業経験の違いをもとに、中学二年時点における学力テストの結果を示したのが図2-2、図2-3である。グラフから明らかなように、「伝統的」授業を「あまり受けなかった」生徒は、「まあ受けた」「とても受けた」生徒に比べ、国語でも数学でも得点が低い。他方、「新学力観的」授業の場合、差は「伝統的」授業ほどではないものの、「とても受けた」生徒の得点は、「まあ受けた」「ほとんど受けなかった」生徒に比べ低くなる。新学力観的な授業ばかりで、知識の理解や定着をおろそかにした授業にさらされすぎると、中学生になってから基礎的な学力の点で問題を抱える可能性が示されたのである。

もちろん、学力に影響を及ぼしているのは、こうした小学校時代の授業のあり方だけにとどまらないだろう。もしかすると、塾に行っている子どもの多い学校ほど、あるいは、

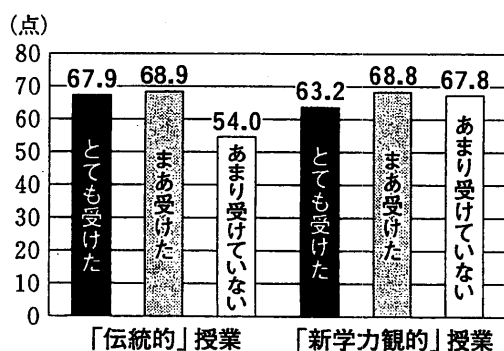


図2-2 小学校の授業経験別の国語の平均得点

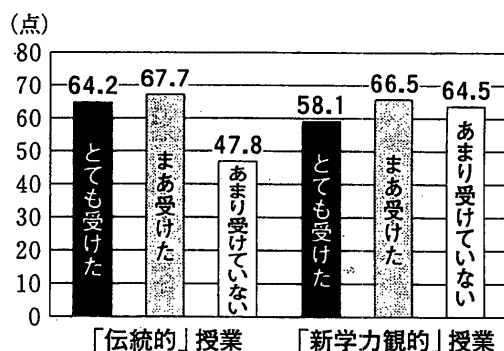


図2-3 小学校の授業経験別の数学の平均得点

家庭の文化的階層の高い子どもの学校ほど、ある特定の授業を行っている可能性があると考えられるからである。そこでそうした他の要因の影響を統計的に一定にした場合の授業のタイプの影響力を取り出すために、重回帰分析という統計手法を用いた分析を行った。ここでは、性別（男子であることの影響を見るダミー変数）、家庭の文化的階層（上位グループであるか、中位グループであるかと下位グループとの差を見る二つのダミー変数）や父親が大卒であるか否か、家庭学習の習慣（週あたり家庭で学習する日数）、通塾日数、学習意欲、などの影響を一定にした場合のこれら授業タイプの影響をみた。結果は表2-6の通りである。

表2-6 重回帰分析による中学生の数学正答率の規定要因

	非標準化回帰係数	標準誤差	標準化回帰係数	有意確率
定数	39.889	1.766		0.000
男子	-1.483	1.251	-0.030	0.236
文化的階層・中位グループ	4.568	1.528	0.088	0.003
文化的階層・上位グループ	5.446	1.594	0.105	0.001
父親・大卒	6.147	1.350	0.122	0.000
週あたり通塾日数	5.398	0.458	0.309	0.000
週あたり学校外で学習する日数	1.217	0.330	0.104	0.000
学習意欲	4.487	0.717	0.177	0.000
小学校での「伝統的授業」の多さ	2.941	0.625	0.120	0.000
小学校での「新学力観的授業」の多さ	-2.462	0.627	-0.101	0.000

生徒が男子であるかどうかという要因をのぞいて、いずれの要因も数学の正答率に統計的に有意な影響を及ぼしている。これまでの分析を裏付けるように、ほかの要因の影響を統計的に取り除いた場合にも、小学校時代に伝統的授業が多いことはプラスに、新学力観型の授業が多かったことはマイナスに影響している。表は省略するが、国語についても、大筋同様の結果が得られる。つまり、生徒たちの印象に残った小学校時代の授業経験の違いによって、中学での数学や国語の基礎学力に、これらほかの要因には還元できない差が生じることがわかったのである。（なお、文化的階層や、父親が大卒であることが、その他の要因とは独立した影響を及ぼしている点についても、この分析によって確認できた。）

前回の学習指導要領の改訂で目玉とされた新学力観は、子どもたちの興味・関心・意欲を高めて、より積極的に学習していく子どもたちを育てることをめざしてきた。しかし、結果としては、そうした授業の影響を大きく受けた子どもほど、中学での国語や数学での基礎学力が低くなるのである。それも、八九年時点では平均点が七十点を越えるような基本的内容を出題したテストにおいてである。

それでは、子どもたちが今まさに通っている中学校での授業は、どのように影響してい

るのか。今回の調査では、中学の授業についても、国語と数学のそれぞれについて、

- ① 教科書や黒板を使って先生が教えてくれる授業
- ② ドリルや小テストをする授業
- ③ 宿題がでる授業
- ④ 自分で考えたり、調べたりする授業
- ⑤ 自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業、

という五つのタイプについて、それぞれの授業がどのくらいあるのかを尋ねた。

ここで、①②は、いわゆる「伝統的」な授業を、④⑤は「新学力観的」な授業を示している。(なお、この分類では③宿題がでる授業の項目を除外した。「伝統的」であっても、「新学力観的」であっても、宿題は出される傾向にあり、宿題の中身までを問う設問にはなっていないためである)。

これら授業のタイプへの回答をもとに、図2-4をもとに、調査対象となった三八のクラスの類型化を試みた。類型化にあたっては、「よくある」を四点、「ときどきある」を三点、「あまりない」を二点、「ほとんどない」を一点として、「伝統型」を横軸、「新学力観型」を縦軸とし、それぞれの全体の平均点を原点とした四象限をつくった。その結果、第一象限から順に「新学力観型」「全力型」「伝統型」「あいまい型」の四タイプを取り出した。

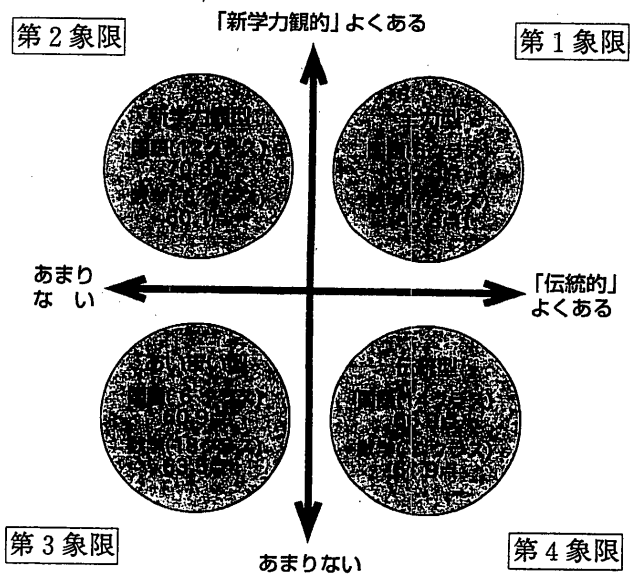


図2-4 授業タイプによるクラスの類型化

図からクラスの分布を見ると、国語では、「伝統型」が多いものの、「新学力観型」の授業もそれに匹敵するくらい行われていると生徒は見ている。一方、数学は「あいまい型」が半数にのぼり、生徒たちにとっては、特に何かの型をもった授業であるとは見ていないようである。

これら四つの授業タイプごとに、それぞれの教科のテストの平均点をみると、国語では、「新学力観型」が七〇・八点と最も高く、続いて「伝統型」六六・九点、「全力型」六五・八点、「あいまい型」六〇・九点となる。それに対し、数学では、「全力型」が六九・八点と最も高く、続いて「あいまい型」六三・五点、「伝統型」六一・九点、「新学力観型」六〇・一点となる。国語における「新学力観型」の得点の高さ、「あいまい型」の低さ、数学における「全力型」の得点の高さに特徴がある。

とはいえ、生徒たちの学力は学校の授業だけで維持されているわけではない。とくに中学の数学は通塾の影響が非常に大きく、通塾しているものとそうでないもので得点に二十点もの差があることを第1章で指摘した。それでは、塾に行っていない生徒の場合、授業タイプによって得点が異なるのか。授業のタイプと通塾の有無別に数学の得点を示したのが図2-5である。ここから興味深い結果が浮かび上がる。

「全力型」や「伝統型」の授業では、通塾と非通塾の差は十点台に抑えられている。新学力観的な授業だけでなく、教師がしっかり教え、授業内容の理解や定着に心がけている「全力型」の場合も得点差が小さい。ところが、知識の定着を怠り「新学力観型」ばかりが優勢になる授業や、教師はそのつもり

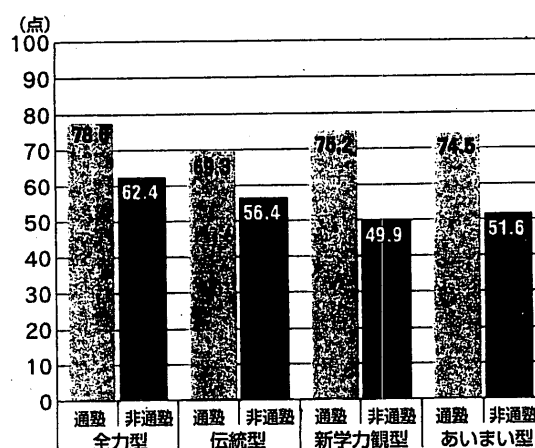


図2-5 数学の授業タイプ別の通塾・非通塾の平均得点

ではなくても生徒から見ればいずれの特徴も持たない中途半端な「あいまい型」の授業では、通塾者と非通塾者との得点差が二三～二六点と大きく広がるのである。塾に行かず（行けず）に学校の授業だけに頼る生徒にとって、「新学力観型」が優勢な授業や「あいまい型」の授業は数学の基礎的な学力形成を損ねる可能性をもつ。裏返せば、新学力観型の授業で学力に問題がないように見えても、実際には塾に行くことで学力が維持されている場合もあるということだ。これらの結果は、塾の影響を取り除いて考えた場合、学校での授業やり方次第で、生徒たちの学力に変化が生じる可能性を示唆している。

そうだとすれば、学校のやり方次第で、学力差をある程度おさえることも可能かもしれない。家庭の環境のみで子どもの学力が決定されるわけではない、ということである。学校の取り組みによって、階層の影響を拡大したり抑制したりすることもあり得る。授業タイプの分析から浮かび上がるのは、そうした面での学校の潜在力と可能性である。

## 6. 「効果のある学校」とは

欧米では、「効果のある学校」(effective schools)という研究分野がある。これは、「学校が作り出す成果」に着目しようという研究の潮流である。人種や階層による学力格差を克服しうる学校の力が「学校効果」と呼ばれ、これまでにさまざまな要因が、学校効果を生み出すものとして指摘されてきた。民主的な教室の雰囲気、強力な校長のリーダーシップ、学校と地域社会との風通しのよい関係、授業研究に熱心な教師集団の存在、等々。そ